いまをときめくブランドで、障害者雇用が始まった

―株式会社サマンサタバサジャパンリミテッド―

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子（写真）小山博孝

表参道店

株式会社サマンサタバサジャパンリミテッド

〒107-0061　東京都港区北青山1-2-3　青山ビル2階
TEL　03-5412-8181　FAX　03-5412-1761
URL　http://www.samantha.co.jp

三年間でゼロから一・六五%へ

若い女性たちに人気を誇るブランド、「サマンサタバサ」。表参道ヒルズ、けやき並木、数々の海外ブランド店……。おしゃれな若者が集う街、表参道と青山通りを結ぶ交差点にたつ旗艦店の広告看板はひときわ目立つ。

本社は、地下鉄の青山一丁目駅からつながるビルの二階で、窓の外に赤坂御用地の緑が広がる一等地。「Samantha Tavasa Japan Limited」という社名は一見、海外ブランドのようだが、一九九四年に東京で誕生した、れっきとした日本の会社だ。海外ブランドの輸入業を手がけていた社長の寺田和正さんが創業。バックとジュエリーなどの企画・製造・販売とオンラインショップの運営を行い、一一のブランドを展開する。従業員は一千名ほどだが、男性は五〇人足らずで女性が圧倒的に多い。

国際的に活躍するブランドをめざす同社は、障害者雇用にも積極的に取り組んでいる。二〇〇七年に初めて採用してからわずか三年で、知的障害者九人、精神障害者一人、身体障害者二人の一二人を雇用して、雇用率はゼロから一・六%を超えた。

そこには、執行役員の中岡俊也さんと小宮山香織さんの熱意があった。中岡さんは当日、出張中。その思いを小宮山さんにうかがった。

「お恥ずかしいことですが、三年前までは障害者を雇用することは考えてもみませんでした。東証マザーズに上場するにあたって、障害者雇用はどうなっているの?と聞かれて、取り組まなければと思いました。社長の承認を得て、急ピッチでいろいろな話を聞きまして、縁あって入社した片山に教えてもらいながら進めてきました」

中岡俊也執行役員

小宮山香織執行役員

障害者就労・生活支援センターで相談員をしていた片山幸代さんは、ハローワークから障害者雇用を積極的に進めようとしている会社があるという話があり、転職した。相談員として知的障害者の就労支援で豊富な経験を持つ片山さんが入社したことで、一気に具体的な展開が始まった。

採用は中岡さん、小宮山さん、片山さんが行った。小宮山さんの話。

「初めて面接を行ったとき、一緒に仕事をするからには楽しく仕事をしたいと思って、応募者のかなりの人数の方を『ごめんなさい』して、二人を採用しました。その後も、いい人を採ろうというこだわりが出てきて、厳しい面接をしてきました。最初のうちはハローワークから『まだまだですね』と言われて、あせりもありましたが……」

企業理念は「やりがい、プライド、よい報酬、そして信頼」を掲げる。

「健常者も同じで、会社の三原則です

朝は朝礼で始まる

社員ジョブコーチの宇田智子さん（写真左）、山口古奈さんと打ち合わせをする片山さん（写真右）

が、明るく、元気で、笑顔を絶やさない人を採用したいですね。面接で初めて障害者の方とお話しましたが、みなさん、ほんとに素直です。この子を幸せにしてあげたい、この子と一緒に働きたいと思う反面、忙しく働いている本社の人たちも何か感じるものがあればいいなと思いました」

ちょうど三年前、知的障害者二人が初めて入社した。

「最初の二人は、朝礼のとき元気にあいさつをして、朝礼後、社長にあいさつに行きました。『どうだった?』と聞いたら、『握手をしてもらったんです』とうれしそうに答えたのが印象に残っています」

障害特性を考え、仕事を洗い出し、社員の理解を求めて

総務で障害者雇用担当となった片山さんは、どこで仕事をするかをまず考えた。

「身体障害の方は、健常者と同じ部署で仕事をすることにして、フォローは健常の方たちにお任せしました。知的障害、精神障害の方は障害特性がありますので、総務課付けで『パートナーズ』というチームを組んで一階の別フロアに職場を設定しました。専門知識がある者が仕事を作り出していくのがいいのではと、小宮山とも相談して進めてきました。中岡、小宮山の理解がありますので、いろいろなことを進めやすかったです」

片山さんは社内を回って、知的障害者にできそうな仕事を見つけ出した。

「その仕事は障害者にいただけませんか、と働きかけました。一般的に雑務といわれる業務はたくさんあります。会社の中から仕事の洗い出しをして、知的障害の人たちができるように工夫をして工程化しました。店舗で使う用度品の出荷、発送業務をしていますが、仕事の内容はとても幅広いです」

その際、双方が有益になる仕事を探していった。

「軽作業といわれる雑務でも、健常者がやったほうが効率的で、健常者のためになる仕事は持ってきません。双方に有益な仕事を捻出するのが難しいと思うのですが、障害のある方たちの活躍の場を作り出せたのが、いいスタートになったと思います」

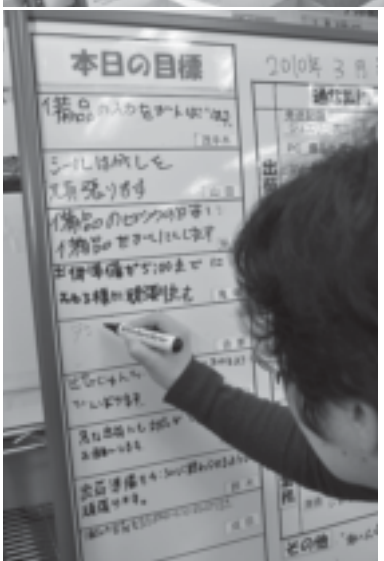
社内の理解を得るために、障害者の働く姿を見てもらうことにも力を入れた。

「二階の本社フロアの中でパートナーズができる仕事を探して、日々の業務の中で誰もが目にする機会をつくりました。コピー用紙や文房具の補充から始めて、広くて大変だと思うショールームのお掃除などをしています」

採用はハローワーク、人材紹介会社、就労支援機関、障害者職業センターなどを通じて行っている。

「うちのメンバーは、働く意識は高いですね。仕事の工夫の仕方によって、職域は広がると思います。平仮名が読めない、計算ができないのにパソコン入力が

サマンサタバサに入社する前は相談員をしていた片山幸代さん



1日の目標、仕事内容を確認して業務にとりかかる

各店舗やブランドごとに色、数字、ローマ字などで区別され、仕分けられている

できるとか、知的障害の人たちはこういう仕事もできるのだということがわかってもらえると、会社のマンパワーとして成長すると思います」

パートナーズの職場づくりには、ジョブコーチとして企業に入ったときに感じたことを生かした。

「一人の事務量があるところに一人の知的障害、一人の精神障害の方が入っていくと、本人たちには『一人ぼっちだ』という精神的な負担や辛さがあったり、反面、会社もどう扱ったらいいか戸惑いがあったりします。本人が孤独感を感じて離職につながるケースを何度も見てきました。グループで働くことは会社の雇用管理もしやすく、本人たちも仲間と一緒に仕事ができるという安心感や、会社に同僚がいるという喜びにつながると思います」

パソコンで伝票入力をする山田まさみさん

サマンサの商品は大好き。仲間と働くことは楽しい

本社一階のパートナーズの職場は、片山さんを含めて三人の社員ジョブコーチと障害者が一〇人。障害者雇用では特に区別をしていないそうだが、全員女性だ。

「本社の一角、都心の青山で働いているのはうれしいと、みんな思っています。サマンサタバサの商品はとても好きで、すごい会社だなと思いながら仕事をしていますし、自分のお給料をためていつかバックを買えるようになりたいと思っています。どこの部署よりも、全部のブランドを把握していると思いますね」

毎日、朝礼を行う。「おはようございます」「ありがとうございます」「失礼します」「すみません」「気をつけます」などのあいさつを練習した後、その日の目標に向かって仕事に取り組む。店舗で使うリボン、ショップカード、シール、インク、封筒などの用度品を、発注書を見ながらピックアップ、各店舗やブランドごとに数字、ローマ字、色で区別された箱へ仕分けしていく。

備品発注の入力作業をする茂手木香織さん

最初に入社した山田まさみさんは、仕事を始めて三年。「パソコンが得意で、いまは間違いがありません。ほかの作業は苦手なんですが、向上心がありますね」と片山さん。

「間違えないように、頑張って少しでも早く仕事ができるようにしています。働きやすい職場です。片山チーフは厳しいですが、仕事から離れると楽しくやさしくて、いろいろな話をしてくれます。みなさんと楽しく仕事をしています」（山田まさみさん）

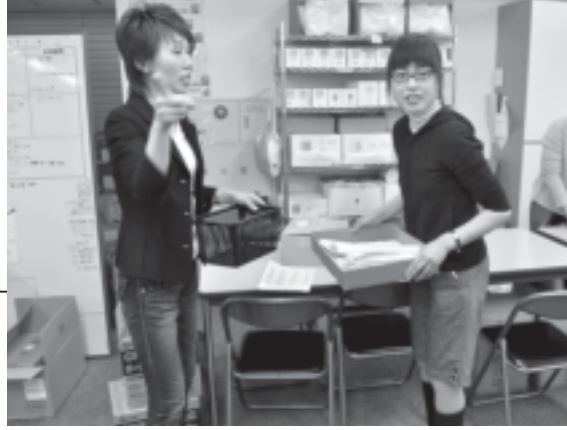
山田さんが入力しているのは、店舗から届いた商品伝票のまとめ。

「生産管理の担当者と相談をして、彼女が入力しやすいようにチェック式にすると、データ集計が簡単になりました。打ちっぱなしではなく、データ加工してすぐ利用できるところまで付加価値をつけています」（片山さん）

もう一人、最初に入社した茂手木香織さんは、使い込んだメモ帳を手に。

「仕事は好きです。覚えるのが苦手なのでメモ帳に書いています。サマンサのバックは大好きで、たくさん買いました。

清掃の仕事を終え、リボンの切断作業をする吉家紀子さん。同じ角度・長さになるように手製のガイドが作ってある



ジョブコーチの宇田さんから、次の仕事の指示を受ける鈴木千絵さん

これからも働き続けたいです」

畠山弘美さんはグループホームに暮らして四年。ここが三カ所目の職場だ。

「新宿の丸井でかわいいポーチを売っているのを見て、この会社で働きたいと思いました。仕事は楽しいです」

ジュエリーの備品は約一〇〇種類。その在庫チェックと棚卸しを任されている。

「大変でしたが、少しずつ覚えてきました。片山チーフは優しい人です」

健常者にも正社員と準社員がいるが、身体障害の人は正社員、知的障害や精神障害の人は準社員。準社員は時給制。勤務時間は一〇時から一七時。通勤は東京二三区内や隣接市から通う。

「雇用管理、職場定着を考えたとき、リスクの少ないように通勤一時間圏内ということも採用基準にしています。ご家族からの問い合わせは、私のほうで対応しています。自宅、グループホームと、身体障害の方は一人暮らしの方もいますが、ほとんどの人に就労支援機関がかかわっています」（片山さん）

パートナーズの休憩時間は一二時三〇分から。全員がお弁当を持って六階の休憩室にくる。その時間に小宮山さんは話をする。

「あいさつもできますし、しっかりしています。ちょっとしたことでも、『ありがとうございます』と感謝しますし、『申し訳ございません』と言います。それは見習うところです。誰よりも元気で、仕事も早いですね」（小宮山さん）

社長も理解を示しているエピソードを片山さんが教えてくれた。

「社内でお花見をするのですが、パートナーズは、社長と専務の間の席なんですよ。会社でこういうことをしたら失礼だと、先輩が後輩を教えるようにしていますので、その席でも礼儀正しいです」

サマンサタバサ恒例のお花見会。寺田和正社長を中心に、その周りがパートナーズ社員の指定席

社員の意識が変わった！会社案内のDVDにも登場

障害者を雇用するにあたって転職したとは思えないほど、片山さんはサマンサタバサの雰囲気に溶け込んでいる。

「自分が持っているノウハウを生かせればと入社しましたが、とても大変で、とても充実した三年間でした。三年間で会社は変わるものだ、できるものだという思いがあります。今は社員として会社に誇りを持っていますが、上司が私のことを理解してくださらなかったら、障害者雇用はうまく進まなかったと思います。社員を愛する社長は、パートナーズも愛してくださいます。一人ひとりを大切にしてくれる会社だと思いますが、トップの思いがとても大きいと思います」

ゼロからのスタートで、大変だったこととうれしかったこと。

「ハンディのある方たちがいると知ってもらうことが第一歩だと思いました。大変だったのは『知的障害者に何ができるのだろう』という意識を変えていくことでした。健常者のサポートができるのだという評価や、こんなこともできるのだという可能性を認めてもらえるようになったことが、とてもうれしいです」

三年間で、社員の目と心は変わってきた。

「いちばん変わったと思うのは、障害のある方も一人の仲間だという意識が社員についたことだと思います。障害者が働いているのが当たり前という形で自然に受け入れてくれています。お店の方たちが本社に来たとき、パートナーズがあいさつをすると一瞬ドッキリするのです

東京青山の本社１階にあるパートナーズの職場

が、あいさつを返してくださいます。若い人たちが多い会社ですが、みなさんが本当にやさしいですね」

お給料を貯めてサマンサタバサのバックを買ったと聞いたときもうれしかった。

「知的障害の方が働いて生活をしていく中で一万円を超える買い物をするのは大変なことなので、『働いたお金で買いました』と言われたのがうれしかったですね。お店でも私たちも『ありがとう』を言葉に出して伝えることをモットーとしていますが、仕事をしていると、『ありがとう』という声が聞こえるので、パートナーズもやりがいを持てると思います。あいさつの部分で高い評価をいただいているのもうれしいことです」

片山さんの指導を見ていて、小宮山さんが感じたこと。

「私にはできない教育の仕方を持っています。そこまで言ったらかわいそうだと思うことも、それはかわいそうではなくて、教えてあげなくてはいけないのだと言われます。パートナーズの皆も、自分のために注意してくれているとわかっていると思います」

片山さんは、今後に向けて。

「これからは、もっと付加価値のある仕事、やりがいのある仕事を作り出していけたらと思います。今でも自覚を持って仕事をしていますが、障害のある方たちが自信を持って仕事ができることが望みです」

パートナーズは、今年から学校説明用の会社案内のＤＶＤにも登場する。推進役を担ってきた小宮山さんの思い。

「社内保育所のオープンも障害者が働いていることも表に出していこうと思っておりますので、パートナーズが作業しているシーンを入れました。全国の約一九〇店舗にも、この仕事はパートナーズがしていますと伝えていますので、障害者が働いていることは店舗でも一〇〇％わかっていると思います。パートナーズ側から見ると、任せられる仕事がルーティンにあることがいいですね」

三年間で〇％から一・六五％へ。定着率は一〇〇％と、一気に障害者雇用を充実させてきた。

「これからもパートナーズしかできない仕事を持ち、自主性を持って習熟し、いずれは一つの会社になったらすごいと思います。弊社は、商品はもちろんパートナーズの取り組みもそうですが、ワクワクとか元気とか、みなさまに喜びを届けられる世界ブランドをめざしておりますので、それにふさわしい企業文化を育てていきたいと思います」

今をときめくファッションブランドと障害者雇用。一時代前には考えられなかった「組み合わせ」がごく自然に行われていることに心が弾んだ。

出版物の整理に汗を流す
榎本和恵さん

不要な書類をシュレーダーにかける
笹山りささん

前日出荷した発送伝票を整理し、
記録に残す畠山弘美さん